

# 小田原史談

第 8 2 号

発行所 小田原史談会  
小田原市西栢山3310

## 小田原北条時代を

### のぞき見して

加藤 誠 夫

足柄上郡大井町金子、最明寺、第十五世、法印大僧都、快運は、天正六年八月二十三日、豆州走湯山般若院の住職であった。



謹んで新年の御祝詞を申し上げます。

今年は乙巳年でありまして「実のある年」だと言われています。そこで

伊豆山走湯権現別当として、伊豆山の般若院に住したてた。

一方頼慶は、徳川家康公の信任厚く、江戸の伝通院の住職に在り、金子村の最明寺の法印、快運に対し、関東真言宗古義法談所、九ヶ条湯権現別当般若院の住職快運の下に在り、塾居したが慶長十四年十月十四日、つ

我が小田原史談会は本年と一偏に中井市長様や諸先生方の厚い御指導に迎えたのでありますが、依り又郷土愛に燃える会

## 巳年

会長 井上 英一

この永い間会報を発行し、市民の郷土に対する認識を深めるなど幾多の業績を残して参りました。ここに希望多き新年を

いに四十九才を一期として学友快運の住する般若院において示寂せられた。

此の間に於て、小田原城の城主、第五代、北条氏直は、天正十八年春四月より豊臣秀吉の大軍に包圍攻撃せられたので、第四代、北条氏政の子氏直は、我が最愛の妻であり、家康の娘であるから、徳川家康に返し自らは、落城の非運の中を高野山へ送られたが、其の行列が出發して、近江まで高野山から、敗戦の將北条氏直を出迎へられて、特別丁重に高野山迄到着したのだった。

其の頃、高野山には頼慶が威を振るい、真言宗、九ヶ条、七ヶ条の掟を出した為、衆僧からきらわれる様になった頃、宗内四面楚歌の時が来たので、氏直は豊臣秀吉の命に依つて大阪

城の近くの狭山に引取られ頼慶は伊豆山の友の元、実には最明寺住職法印快運の所に走つたのであった。

一方の快運は、高野山にて頼慶と別れてから、天正六年八月二十三日、伊豆山走湯権現別当として般若院の住職として着任したが、それからは、箱根権現別当となった。其の頃快運は権僧都で、時に年三十六才とある。

元来伊豆山には、伊豆流と称する法流を伝えていたが、其の血脈の初代は宥祥と言ひ、伊豆山走湯権現に住して、あざなを妙祥上人と言ひ、幼少のみぎり高野山に学び、又比叡山に於て寄教の奥儀を究め、大日教を講義していた。元弘元年になって、大覚寺ノ宮に申し上げて大日経の流布等を行ない、伊豆流と称していた。

二代、宥瞬も、宥祥の伊豆流を伝えて、永仁二年には、大日教を講じ、嘉元三年に鎌倉の智光寺に於て、大日経疏を講義した。

其の後、宥瞬は、今の茨城県水戸市の近くにある吉田の佐久山へ行つたので、ついに伊豆流は、佐久山に伝わり永く伊豆山には断絶していった。

其の後何年か経過し、文禄七年に到りて、法印快運がはる／＼伊豆流の師匠法印宥忠を、今の茨城県の吉田にある六地藏寺(又は六蔵寺とも言う)に尋ね得て文禄七年以前の年、即ち文禄三年四月十一日に、法印快運が、法印宥忠より伊豆流の正統を伝授して、伊豆山の般若院に帰山して再び伊豆の地に於て、伊豆流の正統を伝えることが出来たのであった。此の法流は、快運より弟子高尊法印に伝わり、慶長十五年の伝法灌頂の時に、秀海法印に其の法流を授けたのであった。それから以後の伊豆流は、秀海法印より、法印権大僧都聖心に伝へたのである。

又高野山に於ては、流派があり、

- 三室院 道教方
- 西ノ院 心瑜方
- 中ノ院 心南院方
- 元来最明寺の場合を検討して判ることは、昔小田原城の城主大森信濃守頼頼の代になって、伊豆葦山域の城主北条早雲が、小田原城に其の子氏綱と共に入城して、小田原城には大きな転換期があつて、大森氏に代つて次代を背負う役を買つて出た小田原北条の時代に變遷し、主として早雲の子の北条氏綱が小田原城主として活躍し、父早雲自らは

伊豆韮山城にいて一歩も前進してはいなかった。  
北条早雲自身自ら伊豆の国に居て、北の武田氏や、西方の駿河ノ国の今川氏等の間に居て、いつも敵国の世を韮山城からにらみ渡していたのである。其の死地は伊豆ノ國の修善寺と言われている。  
其の子北条氏綱は専ら小田原に住して、其の政治は大森氏の跡を継続しながら其の線に従って全てがなされていたのであった  
此の氏綱には一人の息、名は北条綱成なる者があって、此の人は、元来北条家の家臣福島氏の児を、早雲が自分の籍に入籍して、改姓せしめて北条綱成と呼んで養育し、成人の後武州河越城、駿州深沢城、相州玉繩城等の城を守備し、攻防戦等夫々の地に於て展開し世に黄八幡と称揚された豪傑であった。

此の頃は小田原北条氏としても地盤を固めつつあった時で、自分の住する地小田原には、小田原城として他にほこの様な立派な城を築城し、少し休息したと思ふ間もなく又他國との交戦にあけくたしていたのである。然しそうした毎日ではあったが、どうも只戦ばかりして暮していたのでもなさそうである。現在残っている、鎌倉の鶴岡八幡宮の別当快元僧都の書いた日記があるが、其の中に、北条氏綱は父早雲の遺志をついで鎌倉八幡宮の造営を実現すべく、夫々の職人を集めて造営工事に取らかり、玉繩城主北条綱成と共に其の工事を自ら見舞つては職人衆に其の都度酒肴は元より其の他沢山下下り物等もあつた事が、事細かに日をおつて記録されてあるのである。此の日記を見れば、其の時の状態を知ることが出来る。玉繩城と言ふ城は、鎌倉の北からの出入口に相当する城であるから、北条氏としては特別に重要視している城であるから、息の綱茂をして当らせ、又綱茂自らも主家北条氏に対しては当主父氏綱の片腕となつて頼みある武将でもあり、氏綱は子供の時から一所に成長した関係もあつて、更に言えることは、北条氏の各所に城構をしたり、築城の必要があつたから、特に此の綱茂の縄張り、工事等に妙を会得した点を重く視て何事も相談をしており、綱茂自身も身を挺して其の事業に當つていた様である。  
大井町金子の最明寺に今現存する古書を見るに、永禄九丙寅年四月署名の文書に、次の事が書いてある。  
吾妻社修理に就て、往昔

三貫文の神田ありしが、村社社殿の修理を怠りしに由り、神田を最明寺に預け修理を任す。尚此の他古文書が五通ある。其の古文書に依つて考ふるに、此の年代は、鎌倉に於て鶴岡八幡宮の社殿を復旧した年が天文年間であるから、此の工事が全部終了した後に、最明寺及び末寺、神社に及んでゐるものと考えられ、年代的には、永禄年間以後に於て、我が足柄方面の復旧工事他の用件を処理した様に思われるのである。  
亦同時期に於て、地積等の再吟味もあり、夫々の所有地の再確認と確定等重要なる問題も此の頃になると安定してきめ細かく処理する領内整理が出来る様になつて来た。  
これ等の文書として現存する同年代に、北条綱茂の出した文書や入道後に出された文書には同感の署名がされている。  
そして次の時代迄復興事業は継続されていたから。大雄山最乗寺に於ても、北条氏康は父氏綱の跡を継いで、七堂伽藍を次々と工事を起して復旧事業は着々と進行させて行ったのであつた。又海洋開発も盛に行なわれ、伊豆大島、伊豆七島を始め、小笠原諸島迄殖産の手を伸ばして行き近海

及び其の沿岸に寄港の根拠地をつくり、海運の発展にも努めて利益を増進するところも考へていた。其の事例としては、伊豆島、三浦半島を注目して見れば判然とする事でしょう。  
小田原北条の時代は、我が國の産業進展の時でもあつたから、万般に互つて国内開発は元より、其の基盤をふまえて、生活向上を切り開いた事に特に異彩ある政治形態の充実を考へていた感が多く実例としてとらえることが出来る。農地・用地・耕地の整理と安定生活を目標とした統制と管理所有権の主張と確認と許可

# 酒匂鍛冶考

川瀬 春雄

酒匂鍛冶の創始期から終末期迄の稼行年数についてはその創始期がはっきりしないが風土記稿の記述などから推定すると約二百年の余になる様に考えられる。この長い年月にわたる鍛冶業者の仕事の内容について出土資料や其の他から考へる年代の下るに従つて移り変つて行つたのではないかと思はれる。  
先づ酒匂鍛冶の創始期と

状態等此れ等に関する古文書はいたる処の名主、在地土豪の倉庫から発見されているのである。又此れ等に関する古文書が圧倒的多量に保存せられてゐる事実は、如何にも農民を大切に考へていたかかうかがわれ、農業と土地の重要性を、これほどはつきり露骨に示すものは無いのである。  
当時の国主は、此等の内容を充足しつつ、其の頂点に立つて、隣国と接し、或いは和解し、時には戦闘的となつて、此れ等より発生した物量を戦闘の中に投入して行つた。  
であることが明らかにされている。しかし当時における「たたら吹き」の操業は細々としたものであつたろうと言はれる。と言つるのはこの操業によつて排出された鉄滓は前記の一個を除いて他に全然発見されていないからである。細々ながらもこれによつて鉄が造られ隣の需要に充じていたものである。さて、この「たたら吹き」に使われな原料の砂鉄は前述したように酒匂川から流れ出した現在の酒匂中学校のあたりの砂浜一帯に多量に含まれていた三十年前終戦直後暫くの間機械を使つて砂鉄を採集していた事もあつたが近年西湘パイパスが出来て以後砂原であつた空地は殆んど宅地化され昔の面影は残されていない。さてこれ等酒匂の「たたら」師はおそらく自分で浜砂の中から砂鉄を選別採集し、粘土で「たたら炉」を築き、木炭を使つて砂鉄を熔かし、粗鉄を造り、之を更に赤熱、叩打等の作業によつて鉄地金とし之を用いて農具や日用品を工作する一貫作業を行つていたものであろう。ところがこうした背景の酒匂川に他國から流れってきた別個の鍛冶集団が定着したのである。これ等の人々はこの様な仕事をしたかと言つと、

粗鉄処理の段階（二次精錬）から製品を作る事だけを仕事としたのである。これ等の人々こそ元禄以後の酒匂鍛冶の繁栄をもたらした古い功業者であろう。

しかし、やがて海岸の砂鉄が涸渇して採集困難になったのか、或は粗鉄の入手が容易になったのか、酒匂村の「たたら吹き」の操業も絶えて粗鉄はいづこから購入する様になり、二次製錬が盛んに行なわれる様になったらしい。現在酒匂町の随所に散見する多量の鉄滓は即ちこの二次精錬の工程で排出されたものであると言ふ。この事については窪田先生の最近の著書「鉄の考古学」に詳細に研究報告がなされている。「酒匂鍛冶の遺物に対する考察」と題して「これ程纏って採集された遺物の中に高温によって砂鉄や岩鉄の熔製された際に生ずる硅石質を主体とする鉄滓が全く見当たらない点に注目したい。これは少くともこの場所では製錬過程を行っていないか、たとする有力な論拠となる。とすれば出土した大型吹き口は大型の割に孔径は小さいので、風当りが鋭く酸化炎を造るための働きをする事が考えられ、鉄滓分の多い荒鉄（和銚の小塊や鋤といわれるもの）を再製錬する

ための設備に用いられたものではないかと、推測される」と述べ、更に重量二十三疋の鉄滓については「製錬作業における炉床の築造（叩きしめ）不十分による差込み類似の現象による発生物と思われるので、小規模な砂鉄製錬が行われていたことは間違いないところであろう」と、「たたら吹き」の存在した事を認めていられる。

元禄年間になってこの鍛冶分地域に四十二戸の鍛冶業者が締めき合つたと言ふ事はそこから排出された鉄滓が現在町のそここゝに見られ、その量からもうなずける。されば之等四十数戸の業者が必要とした原料の粗鉄は当時としては相当の量にのぼつたものであらう。この粗鉄は一体何処から供給されたものであらうか。

これについて、はっきりした言伝へ等はないようだが次に記す「黒金屋」という屋号を持った、酒匂町の旧家が、これと何か関係があるのではないかと興味を感じ度々訪問して話をきいてみた。

国道一号線沿い酒匂町の中ほどに「黒金屋」と呼ぶ町の旧家山崎逸男氏の家が。当主の話によれば昔廻船問屋をした船持ちで遠く大阪あたり迄の航海もあ

つたらしく種々の物資を廻送したと言ふ。船は酒匂海岸の沖合いに停泊し、はし舟を使って荷の積下しをしたとの事である。

さて筆者が関心を持った理由は昔から呼び慣わされてきた「黒金屋」と言う屋号についてである。衆知のごとく「くろがね」とは鉄の別名である。されば酒匂の鍛冶と深い関係があるものと考へざるを得なかつた。

こうして酒匂村に陸揚げされた粗鉄は村内の鍛冶業者に分売されたものであらう。この様に考へてみると「黒金屋」の屋号もすんなりと納得できさうである。またこれら四十数軒の鍛冶業者によって生産された鋸・鎌・刃物、日用金具等の製品は再びこの船に積込まれて消費地に運ばれたのであらう。なお山崎家も昔は鍛冶業を営んだとの言伝えがあり、現在、表井戸、裏

井戸と呼ぶ二つの井戸が残っているが、前者は専ら鍛冶作業に使用されたものと言ふ。この表井戸で気のつく事は、どの鍛冶の仕事場も皆、街道に面して開け放された形のもので、昭和初期迄よくみられた鍛冶屋の姿と同じであつたらう。当

家も亦、酒匂鍛冶の内の一軒であつた。又関東大震災の時、損潰した土蔵から刀剣、槍、捕物用の一袖がらみ」等が発見された事から或は武器の製作もしていたのではないかと話している。

さて、江戸時代末期になつては前述の様に粗鉄を購して、再精錬する方法は少くなり、風土記稿に見る天保十年前後では「今は民戸六十二軒の内、鍛冶を業とする者、わずかに七戸のみなり」と記述されている様に盛業時の姿はなく、僅かな人々が鉄地金になったものを購入して、日用品や農具を作つたのであらう。またこれらの鍛冶に付帯していた仕事として櫛屋と呼ばれた農具の柄を作る業者が、この鍛冶分地域に二軒もあつた事が伝えられている。がこれ等も鍛冶の絶滅と共に消え去り、今は「櫛屋」と呼ぶ屋号として一軒だけが残されている。

酒匂鍛冶の内に刀匠が在在したであらうか。この興味をそそる問について、はつきりとした伝承はない様だが、中野敬次郎先生の著書「小田原百年史」の中に酒匂柳下には刀匠が住んだであらうと記述がある。これについて直接先生にお聞きしたところ「或ころで『相州柳下住』の銘のある

# 鉄

## 栢木次郎

る刀剣を見せられた事があつた」との話であつた。柳下とは鍛冶分の北に隣接した地域で、今でもその地名はかすかに残されている。それは現在の星崎養魚場の周辺であると言ふ。これほど永く続いた酒匂鍛冶の内には刀匠が存在したとしても不思議な事ではない様に考えられる。

この鉄研究論文を教示下さる方々は次の人達に依つて構成されます。土器研究は雲雀会創始者・福谷安威氏。扶桑文化研究会創始者・武内一郎氏。柳シクタニ・順藤武広氏。その他教示賛助者に依る。

当小田原地方の鉄具の出土は古墳時代に、さらに奈良時代に於ける千代台地（分寺建立に使用の古代釘（出土未定））さらに鎌倉、室町、戦国時代に於ける鉄具の発達である。

古墳時代に於ける製錬方法と戦国時代に於ける製錬方法はだいぶ時代とともに変化している、又時代とともに鉄山の開発も進んで来ていることは承知のことと思ひます。

小田原市久野古墳群（第四号墳）より出土の鉄類としては鉄鏃、刀子である。鉄鏃、刀子類使用の原料をどこから入手したか、又製錬したかは不詳の如である。鉄の発見によって時代の変化も文明の変化も生じて来るわけですが、鉄製農具の利用は古墳時代によつてようやく普及、以前の農具は木器、石器、他。しかしながら一般に使用出来る時代も下がる、鋏、馬鋏、鎌の出土するにすぎない数少ないものである、当小田原地方の古墳出土品は久野丘陵古墳群で昔から百塚、千塚と称されている、その中で出土の物は土師器、勾玉、刀子などである、依つて鉄器の利用年代は出土（古墳

造立年)一、二〇〇年から一、三〇〇年ごろである。当時は地方豪族の手中の中に掘られて一般の普及の時代はだいぶ下がって来る。そして使用となる時代は国産生成化となる私有制度からである。さらに時代は下加役として鉄座を設け鉄、鋼、銃を業とする需要者に手渡していた、此鉄の産出は諸国からである。鉄、鋼は山元から大阪問屋に回し問屋から座に買上げられ仲買人をへて需要者に回す。寛政の改革一七八七年に廃止となる。

中欧、西歐の鉄器時代はハルシュタット期、ラテール期に編年される。

●ハルシュタット期  
第一期BC九〇〇~BC七〇〇第二期BC七〇〇~BC五〇〇  
●ラテール期BC五〇〇~BC三〇〇第二期BC三〇〇~BC一〇〇第三期BC一〇〇~西紀

日本に鉄が入って来たのは弥生式時代に青銅器と前後して伝えられたが一般に普及は古墳時代を相当する千代台地分寺建立に使用の大型工具は然るに鉄製であったことに推される。

又古墳内部から副葬品の鉄鏡、刀子を作った鍛冶工(部)はどこから原料なり

炭なりを入手したか不明であります。近在に鉄山(砂鉄)を発見されれば話は別であるが小田原地方の古代鍛冶は証拠となる物はなく鎌倉時代以後ではないかと思ふ。

資源から見ても余にも期待される物は通史から見ても知ることは難である。

戦国時代の世は乱戦といつた時代は美術的より実戦的に移行する時代であり多くの刀や農具類が生まれて来る時代に入る。

合戦の多い戦国時代の小田原も例外ではありません。大友地区、飯泉地区には古塚が多くあり耕地した塚からは当時の刀類などが出土している、当地区は丸子合戦場である。

鉄の歴史は並行して黄金遺跡と埋蔵金にまで目を通すにまでなる。

そして地名や古字から生じる鉄、金、金属産出も又鉄についての研究の参考となる。

鍛冶、タタラ、金産、黄金(岩原城址岩原神社脇道)なども例である。

小鉄(粉鉄)をこがねと称し同音の黄金にまざるとも劣らないとされている点から一様にこがねと称される小鉄(粉鉄)黄金になるから地名や関連した所は要注意が必要となる。

# 九州の大親分(俠客)

井上英一

(下)

業者は近世までは渡り職人で金屋、烟屋、鋳物師と呼ばれらされてる。

鉄の出現は本場のことを言ふと謎であり又解明されない多くの物があります。人類の前にどの様にして出現したか、またどの様に

時に「堺屋さん！御主人と奥さんとは別々の居間、然もあなたは二階の大広間十八畳に只一人で寝、奥様はと言えは玄關脇の六畳間か」と私が問うと

彼曰く「万一の場合(ナグ刀込をかけた場合)にそなへ家内は玄關脇の小屋です。僕の家内とは思ひやまい、女中とも思はず、主人は何処だ？、二階か案内しろと言いながらソラ其処の長火鉢の横隅にボタンがあるでしょう、それを押すのです、すると、一つは二階の僕の居間、一つは隣家へと通ずるのでその隣家には腕の立つ子分共が少なくとも七、八人は常に居りますから、スワ!!大変だと私の二階の裏ばしごを伝わって私の部屋に來ます、そして床の間にある

て文化が伝えられたかは今尨不明であると思ひます。解明するのは一人一人の協力に依るものです、従つて皆様の教示をお願いする訳です。鉄を問わす金属器の歴史とその謎を解明し文化の歴史の一ページを知る。

大小の刀を取って待ち構えろと言ふ寸法、然し未だ一度もこんな経験はなく無事に済んで居りますよ」

「あ、それで判つた。然し刀が多量に置いてある意味が？」と私が言うと彼は

「この御時勢では刀剣類は持つて居つてはいけなかつたから御達しがあったのですが、此処の警察では君だけは是非そのままにして持つて居つて下さいと、たつての依頼なんです。それは不良の徒、暴力団の悪党が盛んに頭を上げ始めたので警察だけでは、どうにも手が廻らない、どうしても民間の志ある者の協力が欲しい、それには君に適任者だから是非頼む」と言うので私は引受けさせられた仕事です。昔の十手、捕繩の輩ですね。

それについてこんな事も

ありました。

数年前の事、警察ではどうにも手に負えない悪党が居た。どうして其の主班の一人を葬むらなければならぬ破目になった。それを君の手で何とか彼奴を片付けてくれまいか」と

私は子分の一人を彼の家の使いにやり好言を以て私のソラ!!あそこ事務所に呼び寄せたので、そしてマンマと其の手に乗つて来た彼をいきなりやめて仕舞つた、その刀でネと刀を指す。

無論人間一人でも殺した罪は法律が許さないので、私の身代りに一人の子分を牢に入つて貰つた、そして八年の刑がその後種々の事柄に便乗して一年で出獄した。勿論警察の方で骨折つてくれたのは無論である。という調子で堺屋大親分の話は仲々つきそうもない。

処でその後三十年経つた昭和三十四年十月に我等小田原市議員総務委員一行が九州方面への行政視察をした際長崎市に行ったので好機とばかり、昔なつかしい堺屋三郎夫妻に会う可い前の所を尋ねた処、戦災後は市街も変り、昔の反町もなくなり新しく町名、番地も変更したので見当らず、やむなく市役所へ行つて調べた。

その結果、堺屋氏は海岸より近い豊後町に移り旅館美奈登荘を経営して居る事が判明したので電話で連絡して我等宿である万屋町旅館常盤で夕食を済ませた後直ちに美奈登旅館を尋ねたのであった。即ち十月二十二日である。

玄關へ入つて

「御免なすつて!!手前は相州は栢山村金波銀波の流れも清き酒川川の片ほとり、水呑百姓の伴に御座んす、二朗は俺(ワシ)の弟に御座んす、今後よろしく御引廻しの程御願ひ申しあげやう」と言い出そうとすると

「ヤァ!!井上先生、ようこそ、しばらくでしたね」と先手を打たれたので中止した。そして見れば御二人共大元氣、そして後の積る話にはつきそうもない。

「弟二朗はあれから横浜港に着いて市内の病院に入院し一ヶ月程居りまして自宅へ引き取りましたが、遂にそれから二年後昭和四年十月三十一日遂に亡くなりました。種々の御厚情有り難う御座いました、又あの親切な看護婦さんには感謝いたして居ります。御ついで折が御座りましたら何卒よろしく御伝え下さい」と

そして小さな記念品を差し上げてお別れした次第である。